

## Y5-17

### 膝蹴りで受傷し遅発性に出血をきたした鈍的肝損傷の1例

さいたま赤十字病院 救命救急センター 救急医学科

○秋谷 雅之、清水 敬樹、早川 桂、佐藤 啓太、  
早瀬 直樹、野間未知多、高橋 希、矢野 博子、  
勅使河原勝伸、五木田昌士、田口 茂正、  
清田 和也

30歳代の男性。

【現病歴】フットサル中に相手の膝が腹部に当たり近隣の病院に搬送となった。CT等各種検査を施行して右第5、6肋骨骨折の診断で帰宅した。同日夜間に嘔吐したため翌日に近医クリニックを受診した。精査のため当センターに搬送された。到着時にヘモグロビンが10.9g/dlと低下していた。胸腹部CTでモリソン窩に径10cm程度の血腫と腹腔内出血を認めた。腹水穿刺で血性であった。直ちに血管造影検査を施行したが明らかな出血源は同定できず経過観察の方針となった。第5病日に再度血管造影を施行し右肝動脈のTAEを施行した。経過観察では明らかな血腫の増大や胆汁瘻、仮性動脈瘤の所見を認めず第28病日に独歩退院した。

【考察】受傷時のCTでは異常所見を認めず翌日のCTで巨大血腫を認めMRI等で遅発性の肝被膜下血腫（日本外傷学会分類1a）と診断した。肝損傷での遅発性出血に関しては受傷3日目から2ヶ月後までの報告が散見される。

【結語】受傷2日目に血腫を認めた鈍的肝損傷を経験したので文献的考察を含めて報告する。

## Y5-18

### 二次汚染をひきおこした硫化水素中毒の一例

石巻赤十字病院 救命救急センター

○榎本 純也、小林 道生、小林 正和、遠山 昌平、  
浅沼敬一郎、石橋 悟

【症例】52歳男性、既往歴なし。マンホール内で作業中に突然異臭が発生し地上まで脱出。しかし、その後意識を失い約2mの深さのマンホール下に墜落。同僚が救急要請、13分後に救急隊、レスキュー隊が到着。到着時JCS300、瞳孔は散大していた。救出作業を行い、32分後、現場出発。直後、救急車内で心肺停止となり心肺蘇生を開始した。49分後、当院に到着。気管内挿管後、胸骨圧迫・エピネフリン投与でまもなく心拍再開。院内到着時より患者からは腐卵臭が発せられていた。濃厚接触者2人に確認したところ眩暈、気分不快感を訴えていた。救急隊員が現場に確認したところ、事故現場にて硫化水素濃度が検出限界である150ppmを超えており、ただちに乾の除染を施行。頭皮や体表からも腐卵臭がしていたため、水除染も施行した。その後循環動態は安定したが意識障害が遷延し低酸素脳症が疑われたため、高圧酸素療法目的に高度医療機関へ搬送される予定となった。安全に搬送するために、消防局の硫化水素検知器を使用し、救急車内の硫化水素濃度を適宜モニタリングし、安全性に十分配慮した。

【考察】下水道を含む閉鎖空間での心肺停止症例では常に硫化水素中毒を疑い、対応する必要がある。また、二次汚染を防ぐために検出器などを使用したり適切な除染を行ったことが重要であると思われた。

## Y5-19

### 腹部鈍的外傷による脾臓損傷1例

京都第二赤十字病院 救急部

○石井 亘、飯塚 亮二、檜垣 聡、榊原 謙、  
松山 千穂、小田 和正、荒井 裕介、梶原 綾乃、  
北村 誠、横野 諭、日下部虎夫

鈍的腹部外傷による脾臓損傷に対しTAE施行し止血しえたが脾臓壊死に陥り脾臓摘出した1例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

（症例）20歳、女性、自転車走行中、自動車と正面衝突、2mほど飛ばされたとのことで救急要請。その後当院救命センター搬入。意識レベルJCS300血圧65/47、FAST陽性、輸液にてresponder 腹部CT撮影、肝損傷と脾臓周囲の腹腔内出血、3-dの脾臓損傷認め腹部血管造影検査施行した。上極枝にextravasation認めマイクロコイル、スポンゼルにてTAE施行にて止血しICU入室。その後血圧低下し腹部超音波検査施行したところ腹水増加していたため再度血管造影施行した。下極にextravasation認めTAE施行し止血しえたが、2週間後脾臓壊死していたために脾臓摘出術施行した。

## Y5-20

### 「合法ハーブ」を使用し中毒症状で搬送された3症例

熊本赤十字病院 救急科

○西原 大貴、宮本 誠、加藤 陽一、原富 由香、  
奥本 克己、桑原 謙、井 清司

近年、ハーブやポプリに大麻などの主成分に類似した合成カンナビノイドなどの化学物質を加工し、タバコ様にしたリ、キセルなどで吸入したりする、いわゆる「合法ハーブ」が問題となっている。2011年10月には熊本でも指定薬物の貯蔵・販売の疑いで逮捕者が出ており、当院でも2012年に入ってから半年間で3例ほど重篤な中毒症状が出現し、救急搬送に至った症例を経験した。

症例1) 24歳男性、「イリュージョン」を初めてタバコ状にして吸引、嘔気あり様子がおかしいとのことで救急要請となった。

症例2) 24歳男性、自室でゲームをしながら「パンドラゴールド」など3種類を吸入、意識混濁・不穏で四肢は過伸展、痙攣様症状を認め救急搬送された。

症例3) 17歳男性、先輩と車内で「スパイスダイヤモンド」を3回吸入、混乱し民家に駆け込み救急搬送された。先輩は車内に立てこもったため、警察に身柄確保されている。

いずれの症例も症状の持続時間は短時間で、対症療法で対応し、自然軽快した。「合法ハーブ」は店頭やインターネットで比較的安価で簡単に購入することができるため、若年者間で全国的に広がってきており、それに伴い中毒症状で医療機関を受診する患者も増加傾向にあることが推測される。医療機関としては、この事実を認知し、症状に応じて適切な初期対応を行うことが重要である。

今回、「合法ハーブ」による急性中毒3症例を通じて、ハーブに含まれる薬物による様々な症状を経験することができた。症例によっては救急隊からの通報時点では、ハーブの使用は確認されおらず、家族の来院後に判明している。若年者における意識障害では、薬物使用の有無を本人や家族から聴取することも診断への手掛かりとなることが示唆された。